魚妖

岡本綺堂

むかしから鰻の怪を説いたものは多い。これは彼の曲亭馬琴の筆記に拠つたもので、その話をして聴かせた人は決して嘘をつくやうな人物でないと、馬琴は保証してゐる。

その話はかうである。

上野の輪王寺宮に仕へてゐる儒者に、鈴木一郎といふ人があつた。名乗りは秀実、雅号は有年といつて、文学の素養もふかく、馬琴とも親しく交際してゐた。

天保三、壬辰年の十一月十三日の夜である。馬琴は知人の関潢南の家にまねかれて晩餐の馳走になつた。有名な気むづかしい性質から、馬琴には友人といふも

のが極めて少い。ことに平生から出不精を以て知られてゐる彼が十一月——この年は閏年であつた。——の寒い夜に湯島台までわざわざ出かけて行つたくらゐであるから、濆南とはよほど親密にしてゐたものと察せられる。酒を飲まない馬琴はすぐに飯の馳走になつた。灯火の下で主人と話してゐると、外では風の音が寒さうにきこえた。ふたりのあひだには今年の八月に仕置になつた、鼠小僧の噂などが出た。

そこへ恰も来あはせたのは、かの鈴木有年であつた。有年は実父の喪中であつたが、馬琴が今夜こゝへ招かれて来るといふことを知つてゐて、食事の済んだ頃を

見はからつて、わざと後れて顔を出したのであつた。かれの父は伊勢の亀山藩の家臣で下谷の屋敷内に住んでゐたが、先月の二十二日に七十二歳の長寿で死んだ。かれはその次男で、遠い以前から鈴木家の養子となつてゐるのであるが、兎も角もその実父が死んだのであるから、彼は喪中として墓参以外の外出は見あはせなければならなかつた。併しこの漢南の家はかれの親戚に当つてゐるのと、今夜は馬琴が来るといふのとで、有年も遠慮なしにたづねて来て、その団欒に這入つたのである。

馬琴は元来無口といふ人ではない。自分の嫌ひな人

間に対して頗る無愛想であるが、こゝろを許した友に対しては話はなか〳〵跳(はず)む方であるから、三人は火鉢を前にして、冬の夜の寒さを忘れるまでに語りつゞけた。そのうちに何かの話から主人の潢南はこんなことを云ひ出した。

「御存知かしらぬが、先頃ある人からこんなことを聴きました。日本橋の茅場町に錦とかいふ鰻屋があるさうで、そこの家では鰻や泥鰌(どぜう)のほかに泥亀(すつぽん)の料理も食はせるので、なか〳〵繁昌するといふことです。その店は入口が帳場になつてゐて、そこを通りぬけると中庭がある。その中庭を廊下づたひに奥座敷へ通ること

になつてゐるのですが、こゝに不思議な話といふのは、その中庭には大きい池があつて、そこに沢山のすつぽんが放してある。天気のいゝ日にはそのすつぽんが岸へあがつたり、池のなかの石に登つたりして遊んでゐる。ところで、客がその奥座敷へ通つて、うなぎの蒲焼や泥鰌鍋をあつらへた時には、かのすつぽん共は平気で遊んでゐるが、もし泥亀をあつらへると、彼等はたちまちに水のなかへ飛び込んでしまふ。それはまつたく不思議で、すつぽんといふ声がきこえると、沢山のすつぽんがあわてて一度に姿をかくしてしまふさうです。かれらに耳があるのか、すつぽんと聞けば我身

の大事と覚るのか、なにしろ不思議なことで、それをかんがへると、泥亀を食ふのも何だか忌(いや)になりますね。」

　有年はだまつて聴いてゐた。馬琴はしづかに答へた。

「それは初耳ですが、そんなことが無いとも云へません。これはわたしの友達の小沢蘆庵から聴いた話ですが、蘆庵の友だちに伴蒿蹊といふのがあります。御存じかも知れないが、蘆庵、蒿蹊、澄月、慈延といへば平安の四天王と呼ばれる和歌や国学の大家ですが、その蒿蹊がかういふ話をしたさうです。家の名は忘れましたが、京に名高いすつぽん屋があつて、そこへ或人

が三人づれで料理を食ひに行くと、その門口に這入つたかと思ふと、ひとりの男が急に立ちどまつて、おれは食ふのを止さうといふ。ほかの二人もたちまち同意して引返してしまつた。見ると、おたがひに顔の色が変つている。先づ一二町のあひだは黙つて歩いてゐたが、やがてそのひとりが最初帰らうと云ひ出した男に向つて、折角こゝまで足を運びながらなぜ俄かに止めると云ひ出したのかと訊くと、その男は身をふるはせて、いや実に怖ろしいことであつた。あの家の店へ這入ると、帳場のわきに大きなすつぽんが火燵(こたつ)に倚りかゝつてゐたので、これは不思議だと思つてよく見る

と、すつぽんでなくて亭主であつた。おれは俄かにぞつとして、もうすつぽんを食ふ気にはなれないので、早々に引返して来たのだといふ。それを聞くと、ほかの二人は溜息をついて、実はおれ達もおなじものを見たので、お前が止さうと云つたのを幸ひに、すぐに一緒に出て来たのだといふ。その以来、この三人は決してすつぽんを食はなかつたといふことです。それは作り話でなく、蒿蹊がまさしくその中のひとりの男から聴いたのだと云ひます。」

有年はやはり黙つて聴いてゐた。漢南は聴いてしまつて溜息をついた。

「なるほど、さういふ不思議が無いとは云へませんね。おい、一郎。おまへの叔父さんのやうなこともあるからね。お前、あの話を曲亭先生のお耳に入れたことがあるか。」

「いゝえ、まだ……。」と、有年は少し渋りながら答へた。

「こんな話の出たついでだ。おまへも叔父さんの話をしろよ。」と、澣南は促した。

「はあ。」

有年はまだ渋つてゐるらしかつた。有年の叔父といふ人は若いときから放蕩者で、屋敷を飛び出して何か

の職人になつてゐるとかいふ噂を馬琴も度々聞いてゐるので、その叔父に就て何か語るのを甥の有年も流石に恥ぢてゐるのであらうかと思ひやると、馬琴もすこし気の毒になつた。上野の五つ（午後八時）の鐘がきこえた。

「おゝ、もう五つになりました。」と、馬琴は帰り支度にかゝらうとした。

「いや、まだお早うございます。」と、有年は押止めた。「今もこゝの主人に云はれたのですが、実はわたくしの叔父について一つの不思議な話があるのを、今から五年ほど前に初めて聴きました。まことにお恥かしい

次第ですが、私の叔父といふのは箸にも棒にもかゝらない放蕩者で、若いときから町家（まちや）の住居をして、それからそれへと流れ渡つて、たうとう左官屋になつてしまひました。それでもだん〳〵に年を取るに連れて、職もおぼえ、人間も固まつて、今日では先づ三四人の職人を使ひ廻してゆく親方株になりましたので、こゝの家へもわたくしの家へも出入りをするやうになりました。さういふ縁がありますので、わたくし共の家で壁をぬり換へる時に、叔父にその仕事をたのみますと、叔父は職人を毎日よこしてくれまして、自分もときぐ〳〵に見廻りに来ました。そこで、ある日の昼飯に

うなぎの蒲焼を取寄せて出しますと、叔父は俄かに顔の色を変へて、いや鰻は真平だ。早くあつちへ持つて行つてくれと云ふのです。これが普通の職人ならば、うなぎの蒲焼などを食はせる訳もないのですが、職人と云つても叔父の事ですから、わたくし夫婦も気をつけてわざ〳〵取寄せて出したのに、見るのも忌だと云はれると、こつちもなんだか詰らないやうな気にもなります。殊に家内は女のことですから、すこし顔の色を悪くしたので、叔父も気の毒になつたらしく、これには訳のあることだから堪忍してくれ。兎も角も江戸の職人をしてゐて、鰻が嫌ひだなどといふのは可笑し

いやうだが、おれは鰻を見ただけでも忌な心持になる。と云つたばかりでは判るまい。まあ斯ういふわけだと、叔父が自分のわかい時の昔話をはじめたのです。」

　有年の叔父は吉助といふのであるが、屋敷を飛び出してから吉次郎と呼んでゐた。かれは左官屋になるまでに所々をながれあるいて、色々のことをしてゐたらしい。それについては吉次郎も一々委しく語らなかつたが、この話はかれが二十四五の頃で、浅草のある鰻屋にゐた時の出来事である。最初は鰻裂きの職人として雇はれたのであるが、ともかくも武家の出で、読み書きなども一と通りは出来るのを主人に見込まれて、

そこの家（うち）の養子になつた。さうして、養父と一緒に鰻の買ひ出しに千住へも行き、日本橋の小田原町へも行つた。

ある夏の朝である。吉次郎はいつもの通りに、養父と一緒に日本橋へ買ひ出しに行つて、幾笊かのうなぎを買つて、河岸の軽子（かるこ）に荷はして帰つた。暑い日のことでもあるから、汗をふいて先づ一と休みして、養父の亭主がそのうなぎを生簀（いけす）へ移し入れようとすると、そのなかに吃驚（びつくり）するほどの大うなぎが二匹まじつてゐるのを発見した。亭主は吉次郎をよんで訊いた。

「河岸で今日仕入れたときに、こんな荒い奴はなかつ

たやうに思ふが、どうだらう。」
「さうですね。こんな馬鹿にあらい奴はゐませんでした。」と、吉次郎も不思議さうに云つた。
「どうして蜿り込んだか知らねえが、大層な目方でせうね。」
「おれは永年この商売をしてゐるが、こんなのを見たことがねえ。どこかの沼の主かも知れねえ。」
ふたりは暫くその鰻をめづらしさうに眺めてゐた。実際、それはどこかの沼か池の主とでも云ひさうな大鰻であつた。
「なにしろ、囲つて置きます。」と、吉次郎は云つた。

「近江屋か山口屋の旦那が来たときに持ち出せば、屹と喜ばれますぜ。」

「さうだ。あの旦那方のみえるまで囲っておけ。」

近江屋も山口屋も近所の町人で、いづれも常得意のうなぎ好きであった。殊にどちらも鰻のあらいのを好んで、大串ならば価を論ぜずに貪り食ふといふ人達であるから、この人達のまへに持ち出せば、相手をよろこばせ、併せてこっちも高い金が取れる。商売として非常に好都合であるので、沼の主でもなんでも構はない、大切に飼っておくに限るといふ商売気がこの親子の胸を支配して、二匹のうなぎは特別の保護を加へて

養はれてゐた。

それから、二三日の後に、山口屋の主人がひとりの友だちを連れて来た。かれの口癖で、門をくゞると直ぐに訊いた。

「どうだい。筋のいゝのがあるかね。」

「めつぽう荒いのがございます。」と、亭主は日本橋で彼の大うなぎを発見したことを報告した。

「それはありがたい。すぐに焼いて貰はう。」

ふたりの客は上機嫌で二階へ通つた。待ち設けてゐたことであるから、亭主は生簀から先づ一匹の大うなぎをつかみ出して、すぐにそれを裂かうとすると、多

年仕馴れた業であるのに、何うしたあやまちか彼は鰻錐で左の手をしたゝかに突き貫いた。
「これはいけない。おまへ代つて裂いてくれ。」
かれは血の滴る手をかゝへて引込んだので、吉次郎は入れ代つて俎板にむかつて、いつもの通りに裂かうとすると、その鰻は蛇のやうにかれの手へきり〳〵とからみ付いて、脈の通はなくなるほどに強く締めたので、左の片手はしびれるばかりに痛んで来た。吉次郎もおどろいて少しくその手をひかうとすると、うなぎは更にその尾をそらして、かれの脾腹を強く打つたので、これも息が止まるかと思ふほどの痛みを感じた。

かさねぐの難儀に吉次郎も途方にくれたが、人を呼ぶのも流石に恥かしいと思つたので、一生懸命に大うなぎをつかみながら、小声でかれに云ひきかせた。
「いくらお前がじたばたしたところで、所詮助かる訳のものではない。どうぞおとなしく素直に裂かれてくれ。その代りにおれは今日かぎりで屹とこの商売をやめる。判つたか。」
それが鰻に通じたとみえて、かれはからみ付いた手を素直に巻きほぐして、俎板の上で安々と裂かれた。吉次郎は先づ安心して、型のごとくに焼いて出すと、連れの客は死人を焼いたやうな匂ひがすると云つて箸

を把らなかつた。山口屋の主人は半串ほど食ふと、俄かに胸が悪くなつて嘔き出してしまつた。

その夜なかの事である。うなぎの生簀のあたりで凄まじい物音がするので、家内の者はみな眼をさました。吉次郎は先づ手燭をとぼして蚊帳のなかから飛び出してゆくと、そこらには別に変つた様子も見えなかつた。夜中は生簀の蓋の上に重い石をのせて置くのであるが、その石も元のまゝになつてゐるので、生簀に別条はないことと思ひながら、念のためにその蓋をあけて見ると、沢山のうなぎは蛇のやうに頭をあげて、一度にかれを睨んだ。

「これもおれの気のせゐだ。」

　かう思ひながらよく視ると、ひとつ残つてゐた彼の大うなぎは不思議に姿を隠してしまつた。一度ならず、二度三度の不思議をみせられて、吉次郎はいよ〳〵怖ろしくなつた。かれは夏のみじか夜の明けるを待ちかねて、養家のうなぎ屋を無断で出奔した。

　上総に身寄りの者があるので、吉次郎は先づそこへ辿り着いて、当分は忍んでゐる事にした。併し一旦その家の養子となつた以上、いつまでも無断で姿を隠してゐるのはよくない。万一養家の親たちから駈落の届けでも出されると、おまへの身の為になるまいと周囲

の者からも注意されたので、吉次郎は二月ほど経つてから江戸の養家へたよりをして、自分は当分帰らないと云ふことを断つてやると、養父からは是非一度帰つて来い、何かの相談はその上のことにすると云つて来たが、もとより帰る気のない吉次郎はそれに対して返事もしなかつた。

かうして一年ほど過ぎた後に、江戸から突然に飛脚が来て、養父はこのごろ重病で頼みすくなくなつたから、どうしても一度戻つて来いと云ふのであつた。あるひは自分をおびき寄せる手だてではないかと一旦は疑つたが、まだ表向きは離縁になつてゐる身でもない

ので、仮にも親の大病といふのを聞き流してゐることも出来まいと思つて、吉次郎は兎も角も浅草へ帰つてみると、養父の重病は事実であつた。しかも養母は密夫をひき入れて、商売には碌々に身を入れず、重体の亭主を奥の三畳へなげ込んだまゝで、誰も看病する者もないといふ有様であつた。

　余事はともあれ、重病の主人を殆ど投げやりにして置くのは何事であるかと、吉次郎もおどろいて養母を詰(なじ)ると、彼女の返事はかうであつた。

「おまへは遠方にゐて何にも知らないから、そんなことを云ふのだが、まあ、病人のそばに二三日附いてゐ

て御覧、なにも彼もみんな判るから。」
　何しろ病人をこんなところに置いてはいけないと、吉次郎は他の奉公人に指図して、養父の寝床を下座敷に移して、其日から自分が附切りで看護することになつたが、病人は口をきくことが出来なかつた。薬も粥も喉へは通らないで、かれは水を飲むばかりであつた。彼はうなぎのやうに頬をふくらせて息をついてゐるばかりか、時々に寝床の上で泳ぐやうな形をみせた。医者もその病症はわからないと云つた。しかし吉次郎には犇々と思ひ当ることがあるので、その枕もとへ寄付かない養母をきびしく責める気にもなれなくなつた。

彼はあまりの浅ましさに涙を流した。

それから二月ばかりで病人はたうとう死んだ。その葬式が済んだ後に、吉次郎はあらためて養家を立去ることになつた。その時に彼は養母に注意した。

「おまへさんも再びこの商売をなさるな。」

「誰がこんなことをするものかね。」と、養母は身ぶるひするやうに云つた。

吉次郎が左官になつたのはその後のことである。

こゝまで話して来て、鈴木有年は一と息ついた。三人の前に据ゑてある火鉢の炭も大方は白い灰になつて

ゐた。
「なんでもその鰻といふのは馬鹿に大きいものであつたさうです。」と、有年は更に附加へた。「伯父の手を三まきも巻いて、まだその尾のさきで脾腹を打つたといふのですから、その大きさも長さも思ひやられます。打たれた跡は打身のやうになつて、今でも暑さ寒さには痛むといふことです。」
それから又色々の話が出て、馬琴と有年とがそこを出たのは、その夜ももう四つ（午後十時）に近い頃であつた。風はいつか吹きやんで、寒月が高く冴えてゐた。下町の家々の屋根は霜を置いたやうに白かつた。

途中で有年にわかれて、馬琴はひとりで歩いて帰つた。
「この話を斎藤彦麿に聞かしてやりたいな。」と、馬琴は思つた。「彦麿はなんといふだらう。」
斎藤彦麿はその当時、江戸で有名の国学者である。彼は鰻が大すきで、毎日殆どかゝさずに食つてゐた。それはかれの著作、「神代余波」のうちに斯ういふ一節があるのを見てもわかる。
——かば焼もむかしは鰻の口より尾の方へ竹串を通して丸焼きにしたること、今の鱠このしろなどの魚田楽の如くにしたるよし聞き及べり。大江戸にては早くより天下無双の美味となりしは、水土

よろしきゆゑに最上のうなぎ出来て、三大都会にすぐれたる調理人群居すれば、一天四海に比類あるべからず、われ六七歳のころより好み食ひて、八十歳までも無病なるはこの霊薬の効験にして、草根木皮のおよぶ所にあらず。

底本：「日本の名随筆　別巻64　怪談」作品社
1996（平成8）年6月25日第1刷発行
底本の親本：「綺堂随筆」青蛙房
1956（昭和31）年7月
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2006年3月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。